

建設トップランナー フォーラムin豊田

■4■

パネルディスカッションでは、建設トップランナー倶楽部の米田雅子代表幹事(慶応義塾大学教授)がコーディネーターを務め、基調講演を行った稲垣隆司・前愛知県副知事と、事例発表した梅村正裕・中部森林開発研究会会長、鈴木陽子・矢作川をきれいにする会長、馬淵和三山辰組社長の3人がパネリストとして参加した。

米田教授は、矢作川を「サイクルシステム」を開ききれにする会の活動が、発した中部森林開発研究会の梅村会長は「国内林を高く評価。鈴木会長は「夫や息子が漁に出てい間、陸(おか)に残った若妻たちが流域の工場や工事現場を回り『川を汚さないで!三河湾が死んでしまう』と訴え始めたのがきっかけです」と語った。

一方、樹木廃棄物の活用技術「ウッドチップリ

建設業独自の模索
1991年ごろから環

パネルディスカッション

森と水と生物多様性

環境保全意識の高まりに期待



生態系を守る建設活動の在り方について活発な意見を交わした

環境保全活動に力を入れて馬淵氏は「建設業は世にいる岐阜県揖斐郡大野町の山辰組。馬淵和三社長は、アユの遡上(そじょう)に適した棚田式魚道は、求人をして若い人の研究を岐阜大学大学院が来てくれない。そこで、で続け、今春、57歳で農ひと味違う企業を目指す学博士の学位を取得した。ために、建設業にしかできない環境保全活動に取

り組もうと考えた」と述べた。

自然と開発の調和へ

3月末に愛知県副知事を退任した稲垣氏は、県職員時代に環境畑を主に歩んできた経験から「『自然をそのままの形で残せ』と言う方々がいるが、人間が手を加えなければ、自然や生態系が劣化してしまうケースもある。大切なポイント、自然と開発の折り合いをどうつけていくかだ」と持論を展開した。

最後に米田教授が「皆書が大きな社会問題になった時代に比べると、確かに川の水はきれいになったが、まだ生態系が完全に戻ったわけではない。昔のような自然を取り戻すためには、単なる行政任せではなく、それぞれの主体がそれぞれの活動を継続していくしかない」と述べ、息の長い

「森資源を守れば、海が豊かになる」という話を聞いたことがあるが、どういふつながりがあるのか」との質問が出た。これを受けて農学博士の馬淵社長は「森の栄養分が川に流れ出し、植物性プランクトンや動物プランクトンを食べるため魚が寄ってくるという循環の仕組みがある」と解説した。

木正芳

(北海道建設新聞「荒